福井の文化をきり拓く

ふつか～と

2007 春 Vol.26

特集―座談会「これがフォーラムの歩む道」

～福井芸術・文化フォーラム、福井市文化会館のこれからを語る

巻頭ギャラリー

――2006年度後期の事業から

NPO法人福井芸術・文化フォーラム5周年記念事業『まちは劇場』が開かれました。

2006年9月29日～10月1日

福井市中心市街地の店舗や工場跡地にその日限りの舞台空間を設営し、演劇、ダンス、パントマイム、マジック、寄席、講談など、11演目におよぶさまざまなパフォーマンスを上演。

下校途中の小学生たちが興味深そうにパントマイムを眺めたり、ご近所の奥様方がふらりと寄席を聴きにいらしたり…

いつものあの場所がドキドキ劇場空間になる、楽しい3日間でした。

日常のなかでこんなふうにアートに出会える街って素敵ですよね。

特集 ・・・Z・・・・・A・・・・・D・・・・・A・・・・・N・・・・・K・・・・・A・・・・・I・・・

座談会「これがフォーラムの歩む道」

～福井芸術・文化フォーラム、福井市文化会館のこれからを語る

これから福井市文化会館はどうなっていくの？ ふくいの文化を、もっと盛り上げたい！

1999年より福井市文化会館の事業運営をすすめる福井芸術・文化フォーラム*1。これまでの活動を振り返りながら、今後取り組んでいくべきこと、あるいは、地域の公立文化施設の抱える課題について、話し合いました。

出席者■樟本　立美　理事長
■岸田美枝子　副理事長・事業部長
■斉藤　厚一　常任理事・自主事業委員長
■竹内　正毅　常任理事・総務部長
■前田　耕一　常任理事・広報部長（進行）
■吉田　和雄　常任理事・広報部会
■山下　博　理事・広報部会
（肩書はいずれも、NPO法人福井芸術・文化フォーラム、2007年3月現在のものです）

もう、文化会館は、いらない!?

樟本　福井市文化会館が出来て40年ほどになります。建物としてはだいぶ古くなり、本来なら建て替えの話などがそろそろ検討されなければならない時期にきていますが、今のままでは、市民はそっぽを向いてしまうのではないでしょうか？ 文化会館なんて、もういらない、と。

岸田　ハーモニーホールがあって、手寄に新しい県民会館ができれば、もうそれでいいと!? 福井駅前には響のホールもあるし。

樟本　そんな状況にあって、いまフォーラムは何をやっていけばよいのでしょうか？

前田　福井芸術・文化フォーラムができて今年で8年目、NPOになってから6年目を迎えます。これまで、さまざまな事業を行ってきたわけですが、はたしてどうだったのか。自主事業と地域創造事業を中心にこれまでの事業を評価し、それをふまえながら、今後の事業をどのように展開していけばよいのか、2～3年先の事業展開を見据えてお話していければと思っています。きょうは、常任理事と広報部会の皆さんに集まっていただきました。ふだんは、部会ごとに分かれて事業を進めていますが、きょうは、双方の事業を横断的に見つめながら議論していければと思っています。

*1　福井芸術・文化フォーラムとは
文化のちからでふくいのまちづくりをすすめるアートNPO。福井市文化会館を拠点として、舞台芸術に関するさまざまな事業を企画・運営している。
特徴は、「市民による」事業体であるということ。福井市の行政と連携しながら、民間の活力を生かした活動を展開。
1999年に福井市文芸協会を発展的に継承し設立。2000年に事業開始、2001年にはNPO法人の認証を受ける。
演劇・音楽・落語などの舞台公演を招聘する「自主事業」、地域の人に文化体験や作品づくりの機会を提供する「地域創造事業」のほか、市民の企画に会場費を助成する「共催事業」、福井市から受託して幼児・小・中学校の学校鑑賞教室などを行っている。

●自主事業

安心して観られる作品を届ける

前田　演劇、音楽、落語など、さまざまなジャンルのいろんな作品を招聘してきたわけですが…

樟本　わたし自身、演劇など舞台作品を観るのが大好きなんです。作品を届けていくなかで、だんだんと、「フォーラムが企画する作品なら安心して観られる」というふうにお客様にも思っていただけるようになってきているのではないでしょうか。

吉田　ある方から、「フォーラムはいつも高級なものをやるんですね」と言われたことがあります。よく聞いてみると、「質の高いものを取り上げている」との意味だそうで。でも、こういう感覚は確かに浸透している感じはします。

樟本　欲をいえば、作品の本数やバラエティを増やしていきたいところですが、これは予算との兼ね合いで考えていかなければいけませんね。でも、文芸協会当時、年3本程度の招聘が限度だったことを考えれば、多少なりとも本数を増やせていることは健闘に値すると思います。
予算ということでいうと、最近は行政サービスでも「受益者負担」という考え方が主流になってきている。文化振興にしても、以前は、東京でしか観られないような作品を福井の人にも出来るだけ安い料金で提供しようという考え方でしたが、この時代においては、観客にも相応の負担を求めてしかるべきという考え方を受け入れざるを得ないのでは。行政にどれだけ文化への予算拡充を求めても叶わない状況にきています。

前田　そうですね、確かにフォーラムの「社会的使命」は十分に果たせていると思います。しかし、事業としてきちんとペイできているか？ 赤字が続いては次の事業につなげていけないわけで、企画の内容と予算のバランスにはとても苦慮していると思いますが、そのあたりはいかがですか。

限られた予算のなかで

斉藤　招聘したい作品は本当に多くありますが、つい、まず予算に目が行ってしまいます。ぜひやりたいが、全体予算から考えるとこのギャラは払えない、そんなことばかりですね。まぁ、限られた予算のなかで、これまで何とか良い作品を届けて来れたと思っていますが。
それと、難しいのは、東京や大阪で受けがよい作品だからといって、福井でも当たるかというと、そうとは限らないこと。その辺の見極めは特に難しいですね。

岸田　わたしは企画を考えるにあたって、「公共ホールとしての使命」を常に意識してきました。個人の私的な趣味や欲求に応える「ワタクシの小屋」ではないということ。公共ホールはまちづくりの装置としての機能をもち、賑わいをつくり、市民の文化的豊かさを実感する、参画できるといったところに事業を持っていきたいと考えてきました。

前田　さまざまなニーズに応えていかなければならないと。

多様化するニーズに応える

岸田　演劇、音楽、落語…ジャンルによって、また演劇でも作品によって、まったく客層が違う。個人のニーズは多様化しているわけで、公共ホールとしてはいろんな人の欲求に応えるだけの作品を提案していかなければいけないと思うんです。
で、そのことと経営的なジレンマは確かにあります。いまフォーラムの事業運営には福井市からの補助金をいただいているわけですが、年間の自主事業4～5本のうち半分は約250万円程度の補助金（つまり税金）をつけている。補助金ナシでペイしようとすれば、人気アーティストのコンサートのような限られたジャンルの公演しかできなくなってしまうわけです。興業的には厳しくても公共ホールとして「質」や先駆的、実験的な作品にもこだわりたい。地方だからこそという思いもある。

斉藤　あと、感じるのは、新幹線沿線と、そうでない福井のような地域の格差！新幹線沿線でないと、劇団サイドもなかなかツアーに出たがらないんです。

岸田　確かにそれはありますよね。たとえば新潟の〈りゅーとぴあ〉や松本の〈まつもと市民芸術館〉は、数多くの招聘公演を実施している。でも、交通の便だけが問題ではなくて、やはり招聘公演はリスクが伴うので、ある程度の予算をかければ、いろんな作品に出会える機会は増えると思います。しかし、今の現実では、物理的、金銭的に限られた選択肢の中で作品を決めているわけです。

前田　なるほど。感覚的な言葉ですが、「福井型プロデュース」とでも呼ぶべきものが、この5年間でなんとなく体験的にわかってきたというところでしょうか。こういう作品をやればお客さんが入るとか、ああいう作品をお客さんは求めているとか…。

岸田　そうですね。それこそ、最初の1～2年はほとんど赤字ばかりでしたが、最近では、事業の半分で

は確実にペイしながら、一方では助成金や補助金*2を生かしながら実験的な作品を招聘して新しい観客層を拡大する、というような取り組みが出来るようになりました。

ペイできるシステムづくり

山下　最近の行政の予算付けですが、知的財産や起業関係は増額傾向にありますよね。それらには、わが国の将来を見据えたミッションが感じ取れます。フォーラムの場合、"新・地方の時代"における地域の若者文化の高揚や、中心市街地再活性化によるいきいきとしたまちづくりに基づく事業提案が行政に対しても訴求力があるのでは、と私は思ってきました。その点でも、先般の『まちは劇場』の成功はうれしいですよね。
一方、企業のメセナについてですが、事業のひとつひとつに企業からの協賛を求める取り組みがもっとできないでしょうか。県内の場合だと、ハーモニーホールの公演では行われているようですが。フォーラムの場合、賛助会員ということで、会全体への協賛はいただいていますが、各企画についての協賛という考え方があってもよいのでは。

樟本　いまの時勢を考えると、県内の一般の企業にそれを求めるのは、なかなか難しいでしょう。

前田　それこそ、バブルの頃は、企業がオーケストラを丸ごと買って、全国ツアーをまわすというようなことも行われていたけれども、バブルが崩壊して、一気にそういうことは無くなりましたよね。

竹内　考えなければならないのは、ペイできる作品を選ぶことではなく、ペイできるシステムづくり、ということでしょう。たとえば、公演の宣伝やチケットの販売窓口として、企業・団体や各種サークルなどをもっと開拓する。「フォーラムが企画する公演なら」と毎回一定枚数のチケットを買ってもらえるような流れをつくらないと。

前田　単純にチラシやポスターでの告知では限界があると。

竹内　そう、がんがんどこにでも貼れるわけでもないしね。情報が届かなくて公演があることを知らない人はまだまだたくさんいらっしゃると思いますよ。公演翌日の新聞を見て、こんなのやってたんだと初めて知るみたいな。でも、各種団体やサークルの組織ルートにのせていただいて、少しでも多くの人に情報を紹介していただくことができれば、また、その組織内でチケットを買っていただくことができればと。これからは、フォーラムの柱のひとつとして、真剣に組織ルートを開拓していく必要があると思います。

吉田　会員の話が出ましたが、フォーラムメイト*3の数を増やしたいですね。これまでの経験からですが、観たい作品であれば、おおい町からでも県外からでもお客様は来てくださるんです。

岸田　「観たい作品」ということでいうと、ここ数年来、個人のニーズが本当に多様化しましたよね。昔に比べるとインターネットなどで気軽に様々な情報を得られるようになったから、自分の好みのものであれば観る、そうでなければ観ない、というのが随分とはっきりしている。お芝居ならば何でもいいわ、という人は少なくなった。

吉田　よい作品をたくさんやって、たくさんの人にフォーラムメイトに入ってもらう。そしてお客様の声もどんどんと吸い上げていく仕組みをつくるべきです。…案外、お客様の生の声というのは耳に届きにくいものですからね。

樟本　鑑賞したいという欲求の掘り起こしは大事ですよね。

竹内　これから団塊の世代が定年を迎え、精神的に余裕が出てくる。たびたび旅行に出かけるわけにもいかないが、ちょっと劇場で文化的なものに触れてみよう、という人も増えてくるでしょう。

岸田　だからこそ、福井市文化会館がんばらな！クラシックならハーモニーホール、商業的なものならフェニックス、というようにホールの持ち味を出して、文化会館も踏ん張っていかないかん。そのためにも、さきほど話に出たような大口顧客の開拓は必要になってくるでしょうね。そうしないと、私たちもどんどん先細りになってしまう。

県内各ホールは連携を!

前田　少し話は変わりますが、そういった県内の各ホールとの連携がもっとできないものでしょうか？複数の館で共同してなにかひとつの企画に取り組むというのはあまり現実的ではないでしょうけど、もっと連絡を取り合い、情報を共有し合うことで、より無理のない公演日程の組み方ができるのではないかと。というのも、同じ日とか近い日でよく似たジャンルのコンサートがあったり、ということが割と多い。どちらも観たいのに一方をあきらめないといけないお客様がけっこういらっしゃると思うんですよね。狭い地域内で、足を引っ張り、潰し合うのではなく、助け合えるような仕組みができないものかと。

岸田　公文協（社団法人全国公立文化施設協会）という組織があって、県レベルでも公文協に加盟しているホールが集まっての会議は行われているようです。参加していないので確かなことはわかりませんが、館の管理・運営に関する話題が多いと聞いています。

前田　全県域のホールの事業企画担当者が集まる、制作者会議ができるとよいですよね。

＊2　助成金と補助金の違い
いずれも国や地方公共団体、あるいは民間財団等から支給されるお金で、融資ではないので、返還の必要はない。助成金の方は要件がはっきり決められていて、要件を満たすものについてはあまねく（すべて）支給されるべきものであるのに対し、補助金は、あるテーマについて公募によって事業を募り、競争的コンペによって支給を決定されるもの、といった違いがある。

＊3　フォーラムメイト
福井芸術・文化フォーラムの鑑賞友の会。「もっと舞台を身近に、楽しく」。年会費1,500円で、入会すると、フォーラム主催公演のチケット先行予約、優待割引が受けられるほか、公演・催しの案内、文化誌の送付等の特典がある。毎年4月～翌3月の年度更新。（※特典等は2007年3月現在）

福井市文化会館外観

岸田　そう！ では、それを誰がコーディネートするべきか？ それを一番やれて、かつ、やるべきポジションにいるのは、県の文化課だと思います。県の文化課が中心となって、県内のホールの企画事業のネットワークをつくってほしい。
たとえば、富山では県がコーディネートして公共ホールのネットワークを組んで情報の交流をしている。あるいは、北海道文化振興財団は、ホールを持つことをせず、道内の公共ホールを支援し、事業のネットワークをつくる仕事を財団としてやっている。
福井県の場合、県の外郭団体である財団（福井県文化振興事業団）がハーモニーホールふくいの運営をしているわけですから、県文化課の仕事に、三国から高浜まで県内すべての公共ホールに対して情報の交流や連携といった指導なり助言なりをしていくことがあってもいい。県としての文化振興の役割は何なのか、そういう政策的な視点をもう少し県には持っていただきたいです。

●地域創造事業

事業を続けることの意味

前田　団体プロデュース型の事業、つまり、地域の方たちに舞台出演の機会を提供する事業について話していきたいと思います。『日本の民謡』*4は2000年から毎年継続している事業で、県内の民謡愛好家の方には随分と定着してきているわけですが、これからどういう方向を目指していけばよいのでしょうか？

岸田　『日本の民謡』は当初赤字スタートでしたが現在では黒字に転換していること、また、毎年新しい市民（民謡の団体）が事業プロジェクトに参画してきているという点で、ある意味、団体プロデュース型の事業としては理想的に育ってきているということができます。しかし、一方、育ってきたからこそ自立すべきだという考え方もある。つまり、事業を続けていくなかでそれぞれの団体が成長してきているわけですから、いつまでもフォーラムの事業という枠組みにのっかっているのではなく、フォーラムから自立して『日本の民謡』のような企画を市民自らがやっていくべきではないかとの考え方です。

前田　確かに自立して公演を打てるようになるのは理想でしょうけど、実際には難しいですよね。団体サイドにしてみれば、こういう発表の機会があると思うからこそそれを利用したいわけで、自分たちで独自の企画をやろうという意識をもつことは難しいと思います。

岸田　『日本の民謡』は、フォーラムの企画として、広報宣伝から舞台運営、集客まで、出演団体が参画する事業プロジェクトのなかで回を重ねるごとに発展させてきたという実感があります。いわば企画を裏方で支える地域創造委員会とフォーラムの事務局の存在があって、出演団体の皆さんはあまり負担なく気持ちよく舞台に立てるというのはあるでしょうね。先日の会議で、継続事業も3年毎の見直しが必要だということにはなりました。でも、市民参画型の事業のありかたそのものが、個人のアイデアやひらめき、思いつきといったものをカタチにするだけでよいのかを含めて論じる時期に来ていると思いますね。

どんな文化を提案するか

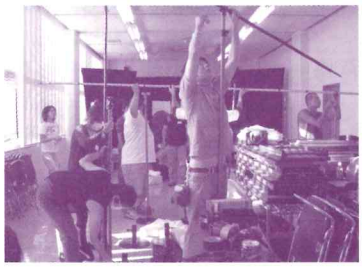
前田　うーん、いま足りないのは、「裏方（スタッフ）の育成」ではないかな。こういう企画の趣旨が参加団体を育てて自立を促すということにあるならば、ただお膳立てをするだけではなく、スタッフを同時に育てていく必要がある。スタッフワークができないと、結局自立できませんからね。先日の『まちは劇場』で舞台アートスタッフ養成講座*5を開いた時にも、受講生たちにスタッフワークの重要性を話しました。スタッフがいないと公演は成立しないんだよと。それで、それを聞いた受講生たちは、誇りを持って『まちは劇場』の現場で働いてくれたわけなんですが。地域創造事業では、制作スタッフ*6から舞台スタッフまで、もっと裏方の育成に取り組んでいく必要があるでしょうね。

岸田　ええ。自主事業が観客の満足度を高めていくものであるのに対し、地域創造事業は、舞台に立つ人、裏方の人、ひとりひとりが主人公になる事業です。市民のいろんなかかわり方があって、参画のしかたが見える事業ですよね。ただ鑑賞するだけでは満足できない人たちをひろい上げていくこと。たとえば、ある人は趣味で民謡をやっている、公民館で童謡を歌っている。そういう人たちが集まってひとつのものをつくった場合、それがもっと大きな公共的な意味を持ちますよ、というところまで高めていきたいわけです。地域の文化をどう創造するか、街に対してどんな文化を提案していくのか、わたしたちは地域創造事業で、そういうことに取り組んでいかねばなりません。

前田　地域創造事業の枠組みを再構築していく必要があるでしょうね。いろんな事業を連携して進めていけるとよいです。さまざまなジャンルのワークショップを開催し、裏方を含めた人材発掘・人材育成をしていくことはこれからポイントになってくるでしょうが、ただ単発的にやればよいと

*4　『日本の民謡』
2000年より毎年6月に開催。2007年には第8回をむかえる。福井市文化会館を会場に、福井県内の民謡愛好家ら十数団体が集い、うたとおどりを披露する。近年は満席となるほどの人気企画に。

*5　舞台アートスタッフ養成講座
NPO法人福井芸術・文化フォーラム5周年記念事業『まちは劇場』（2006年9月29日～10月1日）を開催するにあたり、事前講座として実施した。10回の講座で、舞台・照明・音響や制作の基礎を学んだ受講者は、『まちは劇場』本番の舞台でスタッフワークを担当した。
『まちは劇場』では、福井市中心市街地の空き店舗や工場跡等5箇所に期間限定の舞台空間を設営し、演劇・ダンス等のパフォーマンス11演目を上演した。（表紙写真参照）



*6　制作とは
舞台公演において制作の仕事とは、「作品」を「公演」としてお客様に届けるための仕事全般をいう。出演者や技術スタッフ等との打ち合わせをはじめ、広報・宣伝、チケット管理、公演当日の運営など、担当する仕事は多岐に渡る。

いうものではない。『まちは劇場』のときのように、公演型の企画と連動させてやっていくべきではないでしょうか。ワークショップの受講者が実際の舞台に立ったり、あるいは、スタッフワークを担当するようにする。あるいは、自主事業の公演に関連したワークショップを開催するのも手でしょうね。ダンスの公演の前にダンスワークショップを開いて関心を高めてもらうとか。そういう機会も含めつつワークショップを展開しないと、なかなか身になっていかないと思うんです。逆に、現場（舞台）をひとつ経験するとかなりのことを体験として自分のなかに蓄積できますからね。

NPOだからできること

岸田　もうひとついいですか、少し話は戻りますが。市民団体をプロデュースする地域創造事業をすすめるにあたって苦労すること。それは、さまざまな団体のコーディネートです。でもこれはフォーラムならではの苦労であり、よろこんで引き受けるべきことだと思っているんですが…。実は、民謡にしろ、邦楽にしろ、それぞれの業界にはさまざまな流派やら派閥がある。だから、たとえばどこかの団体が演奏会を企画してもなかなか流派を超えての参加は難しいんですよね。独特な人間関係があるわけです。

樟本　まぁ、それぞれの主張やプライドがありますからね。

岸田　でも、フォーラムがコーディネートすればそれが可能になる。流派やら派閥やらを超えて、ひとつのものを創りだすことが可能になるんですね。もちろん間に入って、いろんな団体の声をまとめる大変さはあるわけですけど（笑）

樟本　NPOであったり公（おおやけ）の立場であるからできるわけですよね。

岸田　そう、ここでフォーラムが、公共の担うべきコーディネート機能を発揮することができるわけなんです。いろんな流派やら考え方の人たちをコーディネートしていきながら、市民が集う場をつくっていくこと。

前田　なるほど。フォーラムには単なるお膳立てでなく、そういったコーディネートの役割もあるわけなんですね。単純に各団体が育ち自立していけばよいということではないと。確かに、フォーラム的な立場の人がいないと、それぞれの団体はバラバラで公演するしかなくて、そうすると文化会館規模の舞台に立つのは難しくなってしまいますよね。

岸田　地域創造事業は、どんなところとでも協働していけるんです。『まちは劇場』は商店街の人たちと一緒にやったし、『みんなで舞台にたとう！』*7は障がいを持つ人やその親、福祉に関わる人たちと取り組んでいる。福井市の歴史のみち整備推進室とは『愛宕坂桜音楽会』を開催したり、あるいは病院からミニコンサートの相談を受けたりもする。子どもたち対象の『夏休みこどもアートパーク』*8もやりましたよね。行政なら縦割りとかセクションの問題があるところを、そんな垣根をとび越えていろんなところと協働していけるのはフォーラムの強みです。文化会館は自主事業（招聘事業）だけをやっていればそれでいいんだ、という意見も一方ではある。でも、わたしは、この地域創造事業こそがフォーラムの存在意義だと思っています。これがあるから、いろんな市民が出会っていける。

樟本　だけど、だからこそ、そのなかで何に取り組んでいくのかはきちんと見極めていかないといけない。予算や人員にも限界があるから、あれもこれもと手を出すわけにはいきませんよね。事業を進めるには財政的な裏づけも必要です。

岸田　はい。本来なら、まずそれぞれの事業に直接関わる当事者がいて、地域創造委員会のメンバーが各事業を下支えしスタッフワークを担当する、で、制作的な部分を事務局が担うという形が理想です。でも、いまそうはなっていない。委員会のメンバーが足りないのでスタッフワークの大部分を事務局が抱えるという状態になっているわけです。さらに、委員会に新しい人たちがなかなか参加して来なくて、マンネリ化しているという問題もあります。人の流れがないことはアイデアの枯渇につながります。

斉藤　いまフォーラムにかかわってもらっている裏方のボランティア*9というと、チケットのもぎりなど公演当日の仕事が主ですが、そこからもっと踏み込んで、企画をプロデュースできるような人材を育てていけるとよいですね。

●総括

いま、誇りをもって

前田　さまざまな話が出てきましたが、そろそろ総括していきましょうか。これから、わたしたちは、どのように歩みをすすめていけばよいでしょうか。

岸田　まずは、いまフォーラムに関わっているわたしたちが、積極的にアピール、発信していかなければいけませんね。わたしたちはこんな活動をしています、こんな活動に関わっています、と機会あるごとに、誇りをもって。

竹内　そうやって、地域の人にフォーラムの名前を覚えていただくことは大事ですよね。

＊7『みんなで舞台にたとう！』
福井県内の養護学校や障がい児学級に通う児童・生徒が舞台発表に向け、ダンスと音楽のワークショップに取り組んでいる。2005年度より開催。2年目となる2006年度の発表会は、2007年3月18日（日）に福井市文化会館で開かれた。

＊8『夏休みこどもアートパーク』
2004年と2005年の8月に、「文化庁文化体験プログラム支援事業」として、福井市文化会館および福井市民福祉会館を会場に開催。園児から中学生までを対象に、日本舞踊や箏・尺八などの伝統文化体験、チアダンス・オペレッタの創作やホール探検などのワークショップを開催した。

＊9　ボランティア
福井芸術・文化フォーラムの事業運営には3通りの関わり方がある。
①事業部会、広報部会、総務部会の各部会に所属し会の運営を担う
②個別の事業のみに事業プロジェクトスタッフとしてかかわる
③気軽にちいさなお手伝い
——この3番目の関わり方がボランティアスタッフである。

吉田　新聞などにも定期的に取り上げていただけるようにアピールしたいですね。

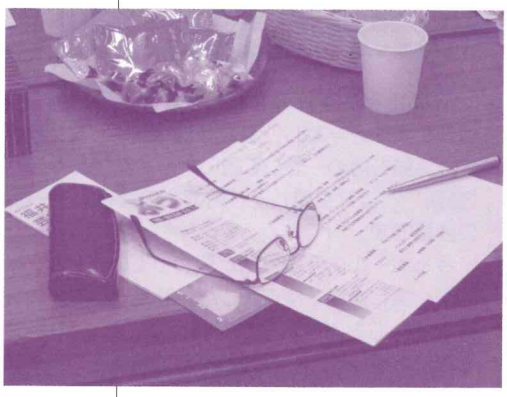
竹内　それと、先ほど自主事業のところでもお話したように、真剣に財政面の課題をクリアしていく必要があります。助成金や行政の補助金に頼るだけではなくて、地元の企業や団体等に少しずつでも理解を求めていく活動を組織だってやっていかないと。

岸田　上越のあるNPO法人は営業スタッフを雇用しています。営業の専門職がいるNPOは全国でもそれほど多くないですが、そういうことも考えたほうがいいかもしれませんね。フォーラムを支援してくれる賛助会員を募る営業スタッフ。

前田　文化の場合、モノを売るのと違ってカタチの見えないものですから、対価性がわかりにくいし、見返りがわかりにくい。そこが賛助会員を募る際のネックになってくるかと。

竹内　だからこそ、企業や団体等に賛助会員を募って、招待チケットを送るとか、チケット料金をキャッシュバックするとかいうのは結構現実的なんではないかな。

樟本　そうですね、賛助会員という「応援団」を増やしていけるといいですね。文化を育む応援団。



夢はふくらむ～文化施設だからできること

岸田　将来的には、フォーラムで舞台作品をつくって、フォーラムの作品が他の劇場でギャラつきで上演されるようになるとよいなぁ。あるいは、フォーラムが企画した舞台芸術に関する学校教育プログラムを多くの学校が採用するとか。
もうひとつは、文化会館で舞台芸術に関するカルチャースクールが日常的に行われるようにしたい。いまのような単発的なワークショップではなくて。文化会館に来れば、いつでも、舞台芸術を体験したり作品づくりをやっていたりするようになるのが理想です。そこで生まれた作品をまた地域や学校に届けていく、素敵ですね。文化会館が公共ホールとして舞台芸術の拠点になるためには、会館が教育や福祉、まちづくりと結びついて情報を発信する。それを享受する多くの人々が豊かさを実感できる、というのが夢であり理想かな。だれ？「妄想」っていうのは（笑）

樟本　東京やら都市部ではそういう取り組みをしている館はいろいろありますね。人口規模も違いますから福井では必ずしも同じようなことはできないけれど、福井型のそういった取り組みができるとよいです。

前田　市町村合併や行政の予算規模の縮小もあって、各地の公共ホールはどんどん自主事業を縮小したり、貸館だけしかやらないところも出てきている。

岸田　それでは単なるビル管理と一緒ですよね。文化施設の意味はどこにあるのかしら。

前田　フォーラムが市民の立場で行政に提案していくこと、あるいは、NPOとして市民とともに取り組んでいくこと。いろいろありそうですね。

樟本　そうですね。事業企画とは別に、文化会館の良さを市民にかみくだいて伝えていくとか、市民に対してのリーダーシップをとっていく必要があると思います。市民サイドに、文化会館を活用していこうという力がないと、行政も動きづらいですしね。フォーラムは大きな宿題を抱えていると思います。

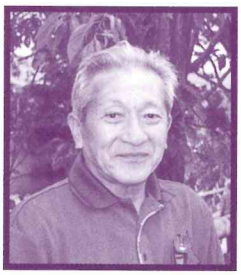
前田　はい。今後のフォーラムの取り組みについて、あるいは、公共ホールの課題について、エッセンスの詰まった座談会になったと思います。ありがとうございました。

<以上>

[一行掲示板] **永田雅秀箏リサイタル**　2007年5月12日(土)13:30開演　ハーモニーホールふくい(小ホール)
入場料2,000円(学生1,000円)　お問い合わせ：秀萌会(0776-26-0681)

追悼――荻野嗣昭さん

福井芸術・文化フォーラムの設立以来2004年5月まで理事長を務めた荻野嗣昭さんが、2007年1月3日、逝去されました。



前理事長だった荻野さんが逝った。文化会館の館長時代「文化ホールがまちをつくる」と題した講演会で「公共ホールの館長は管理者ではなく、事業部長にならなくてはいけない」と講師に名指しで指摘された。それが「福井芸術・文化フォーラム」設立につながるまで、彼の中で静かなエネルギーとなって燃え続ける。軽妙洒脱な物言いで煮詰まった議論を和ませる、飄々とした御仁だった。荻野さんの存在なくして、今のフォーラムは語れない。ありがとう、そしてお疲れさまでした…

（岸田美枝子）

リ・レ・ー・ト・ー・ク

前回の書き手　仁愛女子短期大学名誉教授　寺尾敏幸 さんからのご紹介です。

わたしたち、音楽つながりです。
清水八洲男先生とは、昭和48年福井市交響楽団（福井交響楽団の前身）入団以来の関係です。

福井市文化会館と共に歩んだ私の音楽人生

「福井室内管弦楽団」主宰 **清水八洲男**

昭和43年生まれの会館も今年で38歳となりました。それは私が大学を卒業し、音楽教師として、又、音楽愛好家としての活動を始め、そして続いた幸せな年月です。
“音楽”とは「空間」と「時間」の芸術。――偉大な指揮者の言葉です。

今もホールの空間は昔と変わっていません。時間だけは容赦なく流れ過ぎてゆきました。聴衆として一流の演奏家の演奏を聴いておおいに感動を憶えたことは貴重な経験でした。それにも増して、多くの仲間とこの舞台で演奏できたことが何よりの宝となっております。当時の島田市長さんの応援もあり、福井市交響楽団が発足（当時はオーケストラといえば福井大学フィルハーモニーのみ）。アマチュアのオーケストラとして練習を重ね、第2回の定演では手塚幸紀指揮、荒憲一のピアノで、ラフマニノフ作曲のピアノ協奏曲第2番を演奏、当時私はチェロパートを担当していましたが、その時の感動は忘れることができません。ハプニングもありまして、本番前、フルートの2ndがみあたらず、指揮者の怒りは大変なものでした（ピアノでいえば鍵盤1個の音が出ないのと一緒）。結局1人欠員でやってしまいました。

その他、吹奏楽の県大会、北陸大会で、この会館で演奏できることは学生たちにとって最高の誇りと喜びでありました。又、オーケストラピットを使って地元のバレエ団との共演で「白鳥の湖」など演奏、2回続いた「福井オペラ」公演では地元の声楽家たちとの共演。皆手弁当で心あつく、ときめいておりました。数えだすときりがありません。20回続いた「福井の第9」、私は10回連続で合唱団の一員として出演させていただきました。

最近文化会館は少しさみしい気がします。年1回くらい、地元の音楽家の手で、創作オペラ、バレエなど、オケピットを使っての演目をやってみたいものです。

清水八洲男●しみず　やすお
昭和42年、福井大学教育学部音楽科卒。音楽教師として合唱、吹奏楽、管弦楽部を育ててきた。「福井交響楽団」や「福井ジュニアオーケストラ」を結成したほか、伴奏ピアニストとして、多くのリサイタルの伴奏をつとめている。平成元年、福井で唯一の室内オーケストラを結成。定期演奏会や各市町村でのコンサートをはじめ、学校、病院、図書館などでフロアコンサートを実施するなど、県民に親しまれるオーケストラとして活動中。「福井県芸術祭賞」「げんでんふるさと文化賞」「文化芸術賞」受賞。

●福井市文化会館にまつわるエピソードをテーマに、書き手の紹介でつながります。誰のどんな話が登場するか、次号もお楽しみに。

Program 福井芸術・文化フォーラム 事業のご案内

第8回日本の民謡～うたとおどり～
6月24日(日)

会場：福井市文化会館
13:30開演（12:30開場）
全席自由◆1,050円(税込)
チケット発売開始　4月12日(木)

福井県内で民謡の活動をしているさまざまな団体が年に1度集まって日頃の成果を披露します。人々の暮らしの中から生まれ、踊り、歌い継がれ、時代を越えて今に継承される民謡をお楽しみください。

出演：彩音会、加賀山流民謡昭絵の会、三絃明萌会、秀和会、東安居民踊クラブ、福井民友会、藤己会、松本民謡会、民踊おりづる会、民踊さくら会、森田みやび会、琉球舞踊サークル、いちゃりばちょーでー

入会のご案内

文化でふくいのまちづくり。一緒に活動しませんか？あなたに合ったかかわり方があります。

[正会員(アートスタッフ)] あなたの思いや夢をカタチに
3通りのかかわり方
①会の運営を担う―部会や委員会に所属
②ひとつの事業の企画から実施まで―事業プロジェクトスタッフ
③気軽にちいさなお手伝い―ボランティアスタッフ

[準会員] 資金面での支援協力
・個人賛助会員　・法人賛助会員　・団体会員

[フォーラムメイト(鑑賞友の会)] もっと舞台を身近に、楽しく
・フォーラム主催公演のチケットを先行予約、優待割引
・公演・催しの案内、「ふっか～と」の送付

■会費＝年会費

正会員（アートスタッフ）	1口	5,000円
準会員　個人賛助会員	1口	5,000円
法人賛助会員	1口	10,000円
団体会員	1口	3,000円
フォーラムメイト（鑑賞友の会）		1,500円

すべてのお問い合わせは
福井芸術・文化フォーラム　電話 0776-23-6905
受付時間　月～金（祝日を除きます）10:00～18:00

編集後記

◆ふっか～と2007春号をお届けします。
暖冬の中でも矢張り待ちに待った春。フォーラムも新しいスタートです。みな様のご感想・ご意見をお寄せください。
フォーラムの窓から近き花見かな　(K・Y)

◆5年経って足りなかったことが今見えてきました。さらに5年でこの足りない部分を補い、フォーラムの福井型プロデュースを完成しましょう。　(K・M)

◆「日本中が私たちの劇場」を掲げて、50余年に亘り、劇団新制作座の代表を務められた眞山美保さんが亡くなられて3月で丸1年になる。東京で2度おめもじしてご高著も頂いたが、とりわけ、主宰者拝命中の異業種交流会も尽力した、この文化会館での昭和62年7月の「坂本龍馬」公演の電話交渉段階での、今流に言う“舞台芸術におけるメセナ談義”が印象深い。　(H・Y)

福井芸術・文化フォーラムの活動を応援しています

セーレン株式会社

北陸労働金庫

次号2007秋号は2007年10月1日発行です

発行　NPO法人 福井芸術・文化フォーラム
910-0019 福井市春山2-7-1 福井市文化会館内
tel.0776-23-6905 fax.0776-23-7905
http://www1.fctv.ne.jp/~geibun/